



宇宙をうたう

海部宣男 著

新書判，222 ページ，735 円，中央公論新社

読み物

お薦め度
☆☆☆☆

古今東西の詩歌を拠り所として、宇宙との共感、人の営みに関する随想集である。実にギリシャ詩歌から漢詩、インド、古代ナスカ、縄文遺跡、沖縄古歌謡、万葉、王朝和歌、江戸雑俳、現代短歌俳句にわたって、関心の幅は、博く寛やかである。学問の最先端で活躍する忙中であって、想念に浸り、旅した愉悦の時間の産物—心象スケッチ—であろう。

典拠された詩歌の大半は私には初対面であり、よき友を紹介して下さっているような出会いの楽しみがある。いくつかは、昔、教科書で読んだ覚えが微かに残る。埃を払って取り出して読み返した。これまで使わずに錆びついていた“こころ”／精神のある部分呼び醒してくれる。

著者は学問に志して以来、宇宙のなかに人間の占める位置とその営みの不思議さを、“止みがたい欲求”として、思い続けてきたという。その持続の賜物である本書を読んで、花鳥風月、人々の営み、過ぎ去った想念、ヨーロッパ科学の力量を共感する。お盆会に因んで日本仏教の様々な投影を考える機会も得た。

朗々と謡いあげる琉球古歌謡、日本の詩歌の、花鳥風月の中にもものあわれを感じ、浄土への憧れ、俳句や和歌のいとおしさ、潔さ、諦め、に感じ入りつつも、日本人の宇宙への関心の希薄さには不満気である。その時々々の社会の情勢や科学の展開を反映した実在感を熔かし込んだメタファーや預言として、賢治や心平の宇宙は、しんと心に響く。小さな身体—のどこか；観念—が自然と共鳴し合うことによって、かくも大きな宇宙を映じ、詠じ、認識することができる。

日本人の想念の古層を形成してきた仏教にも関心が及ぶ。浄土への願望、大日如来—曼荼羅—密

教、密厳浄土、法華経、と仏教は様々に形を変えた。仏教の方が自然哲学的であることを思う；縁起説—物理法則、真空—無（ゼロ）、三千大千世界—多元宇宙、は現代宇宙観に親しい。

仏教は解脱／救済をひたすらに欣求して自在に形を変え、時代と風土とに調和してきたのに対してヨーロッパの自然科学の巨大さも思う。キリスト教は中世の闇の底で絶対神の証明に四苦八苦しつつ、突如、サイエンスという不思議なことをはじめた。ティコから、ブルーノさらにガリレオと連なる人生を賭けた科学の営みがある。

サイエンスが、知識の断片に成った現在（厄介なことにその方がずっと強力なのであるが）、サピエンス—知恵からは遠ざかっているのかも知れず、この本が、呼び覚してくれるのは、諸科学の基となる、素朴な「こころ」の感動や共鳴といったなものに触れるからであろう；星々の慕わしさ、アークトゥルスの温もり、かわいらしい御統（みすまる）、宇宙の起源（空・ゼロ）や果て（無限大）を知りたいと切に願う心。

このような“こころの不可思議さ”を、切所に立って覗き込もうとしているのではないか。

学問とは—学びて問いかける—素朴な衝動として、西洋風気迫と東洋風静観との間を、歯ぎしり燃えて行き来する一人の修羅の姿が浮かぶ。野辺山やすばるの建設は観測者の魂なのであろう。宇宙への“祈り”に通ずるのかもしれない。

最先端の研究を拓きつつ、雪月花の諷詠を愛で、人の日々の営みや冒険に思いを馳せる天文学者の類稀な随筆集である。

佐藤修二（名古屋大学理学研究科）